



「瑞穂の国」、稻穂がみずみずしく育つ国を意味しており、昔から我が国を誉めて言った呼び名という。これは、お米を腹一杯食べたいという大和民族の切なる願いから生まれたのではないかと、私なりに考えてきた。日本の歴史上、奈良時代の一時期を除いて米が足りた時代はなかった。それが戦後23年を経た昭和43（1968）年にやっと自給出来るようになったというのに、一昨年以来昨年もその米を巡って混乱が続出した。一体どうしたことだろう。

昨年の暮れも押し迫って、そんなことに思い回らせていたら、「太平洋戦争終戦80年回顧録『海行かば 山行かば』山路恒人（本名：恒利）」本文6ページの小冊子が届いた。始めたばかりの仕事の手を休めて、早速読み始めた。思わず知らず涙が滲んできた。3000字余りだが、最後の数行になって我慢出来ず、しゃくりあげていた。大晦日、テレビの除夜の鐘を聞かずに、2度目を読みつつ新しい年を迎えた。



ここで私の能力を振り絞って、「海行かば山行かば」を極簡単に要約して示したい。

著者山路さんは昭和12（1937）年に小学校に入学。長兄は学校の成績が良かったので、海軍兵学校に入学した。昭和16年2月8日、突然日本軍がハワイの真珠湾を爆撃、大東亜戦争となった。開戦して1年近く経ったある日、「戦死」の知らせが届いた。小学校の講堂で村葬が行われた。偉い人の焼香が延々と続いた。終わると、「海行かば」の合唱。（「海行かば」とは、万葉集で大伴家持が詠んだ歌で、当時は海軍の儀礼式歌となっていた）

海行かば水漬く屍
大君の辺にこそ死なめ

山行かば草生す屍
顧見はせじ

山路さんは、2番目の兄（登）とは12歳も離れている。釜山の税関に勤めていた。陸軍に入隊して「憲兵」になったと便りがあった。「あのやさしい男が憲兵など勤まるのだろうか」と父が呟いた。

山路さんは昭和20年1月、高等科2年（現在の中学校2年）在学中に、役

場は若者を兵隊に取られて人手不足のため、学校から推薦されて役場で働き始めた。13歳だった。

8月15日正午、天皇陛下の玉音放送があり、日本の敗戦を伝えた。秋も深まつた11月のある日の夜、父が「登は春まだ浅い3月に中支那で戦死したそうだ」と話した。言い終えると突然声を上げて泣き出した。日頃丈夫で働き者の父が、それからは体調を崩し、よく休むようになった。

山路さんの「海行かば山行かば」に、どうしてこんなに涙が出るのだろう。私は涙の目を閉じて思索した。私の4歳3ヶ月の時の悲しく辛かったことを思い出していた。そして、山路さんの悲しみ、辛さ、苦労は私の何十倍だっただろうか。山路さんと知り合いになったのは定年退職後である。13歳から役場に勤めたことは聞いていたが、兄2人が戦死されたことは知らなかった。「海行かば山行かば」を読んで、少年時代の悲しみと苦労が、山路さんの人柄の根本にあるのだと教えてくれた。

私の父は、音田祭（当時は10月20日と決まっていた）の3日前・10月17日に出征した。その日から2週間と6日後の11月13日に、祖母が急逝した。60歳だった。その年の1月3日生まれの妹の子守が私の仕事になった。近所の子供たちは皆が集まって遊んでいるというのに、私だけがゼロ歳の妹の子守を朝から晩まで一日中しなければならなくなつた。

昼間は何とかなるが、日が暮れるとよく泣いた。抱っこしてやると泣きやんだ。放すとまた泣いた。日が暮れると抱っこしてやって外縁に座って、お月さんを見ながら一緒に泣いた。妹は泣き疲れて眠ってしまう。寝かせると泣き出すので、手がだるいのを我慢して祖父と母が田圃から帰って来るのをじっと待った。

暫く経ったある日、すぐ近所の静子おばさんが見に来てくれた。母の大の仲良しだった。ダンナさんは、父より少し前に出征していた。子供は未だいなかった。一人住まいだった。祖父と母の帰りが遅いと、家へ連れ帰って、お芋の茹でたのを食べさせてくれたり、お風呂にも入れてくれた。本当に嬉しかった。そうこうしているうちに、近所の中学生のハルミ姉ちゃんが、学校か



ら帰って来たら見に来てくれるようになった。ハルミ姉ちゃんの母上は農繁期などの忙しい時には、いつも我が家へ手伝いに来てくれていた。その母上が「学校から帰ったら、行って健ちゃんを助けてあげな」と指示してくれたのかもしれない。私と妹は、静子おばさんとハルミ姉ちゃんに感謝してもとてもしきれない程にお世話になった。

母は妹を抱いて向こうへむいて寝た。私は母の背中に顔をくっつけて寝た。一日中で東の間の幸せだった。母は時々むせび泣いていた。自分は泣いてはいけないと我慢していると、いつの間にか寝入っていた。

近所には、母と年齢の近い人が、母を含めて4人いた。母以外の3人のダンナさんは戦死した。生きて帰って来たのは私の父だけだった。父は昭和21(1946)年7月20日、私が1年生の1学期の終業式の日に帰って来た。学校から2.5キロの道を帰っていると、^{むすび}産巣日神社の裏の所で、前川忠夫元香川県知事の父・嘉太郎さんが、「ボクよ、お父さんが帰って来たぞ。急いで走って帰れ」と教えてくれた。前川忠夫さんは私の父の1年上、大正10(1921)年3月上高瀬小学校卒業である。因みに貞広観山(本名:常吉)さんは父の1年下である。



静子おばさんは、昭和25(1950)年に、田圃と家を売り払って東京へ行ってしまった。私は小学校5年生だった。おばさんが可愛がっていた犬は私がもらった。母へ時たま手紙が来ていた。おばさんに会いたかったが、子供にはどうすることも出来なかった。



高瀬高校3年生の時、国家公務初級(郵政)を受験した。「尊敬する人」のテーマで作文を書いた。私は「東京のお母さん」と題を付けて、静子おばさんことを書いた。その時、東京の大学へ合格すればいつでも会えるじゃないかと気が付いた。それまでは、大学へ行こうとは本気では考えていなかった。校外模試を受けて、志望校の欄へ「東京教育大学農学部」と書いて提出したら、「合格率25%」と結果が返ってきた。その日から、「絶対に合格してやる」と気合を入れて猛勉強を始めた。「百姓には学問は要らん」の一点張りの父には、「試験を受けに行かせてくれ。万が一合格しても行かへんきに」と言って許可してもらった。そして合格した。

父の妹のトシ子叔母さんが、三日三晩「行かせてやれ」と説得してくれて、「卒業したら帰って来てこの家の跡を継ぎます」と2人に約束して許可が出た。

「4月1日午前7時10分東京着の急行瀬戸で上京するので、迎え頼む。一晩泊めて下さい」とお願いした。すぐに「OK」の返事が来た。4月2日に、おにぎりを持って大学へ行って、未だ薺の桜の木の下で、静子おばさんと並んで座っていただいた。静子おばさんは新宿の東京医大病院で看護師をしていた。在学中気が滅入ると仕事場へ訪ねて行った。お顔を見るだけで元気が湧いて来た。私の東京のお母さんだった。私が大百姓の長男でありながら、当時の東京で勉強して、郷里へ帰って高校の教師になれたのは、東京のお母さんの力であった。そのお母さんは、戦後一生独身を通して生涯を終えた。

こうして書いていると、母の臨終の言葉が浮かんで来る。

「明子が生きていたら、お前に…あなたに辛い目ささんでよかったですのに…。

こんまいお前に芳子の子守をさして、…辛い目さしたのう……」

「いや、何ちゃつらいことやなかつたぞ。静子はんとハン（ハルミ姉）ちゃんが助けてくれたきに……」

「静子はんはほんまにええ人やつた……」

病院で母の手を握って話したこれが最後の言葉だった。

辛かった妹の子守は、私の人生にとって、年齢を重ねるにつれて大変幸福なことであったと思うようになった。

外山滋比古先生（大学時代助教授で英語の先生、お茶の水女子大学名誉教授）の「こどもの能力」と題する隨筆の中の一節を追記しておく。

昔の人は、若いときの苦労は買ってでもせよ、と言ったが、若ものになってからではおそすぎる。こどものうちに、つらいこと苦しいことを経験するのは、大変な幸福であるということができる。そう考えるのが知的である。

（令和8年1月1日）